

生物としての静物

開高 健





集英社文庫

いきもの せいぶつ
生物としての静物

1994年2月25日 第1刷

定価はカバーに表示してあります。

著者 かい こう たけし
開 高 健

発行者 若 菜 正

発行所 株式 集 英 社
会社

東京都千代田区一ツ橋2-5-10
〒101-50

(3230) 6100(編集)

電話 東京 (3230) 6393(販売)

(3230) 6080(制作)

印刷 凸版印刷株式会社

本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。

落丁・乱丁の本が万一ございましたら、小社制作部宛にお送りください。
送料小社負担でお取り替えいたします。

©Y.Maki & M.Kaiko 1994

Printed in Japan

ISBN4-08-748129-8 C0195

集英社文庫

生物としての静物

開 高 健



集英社版



生物^{いきもの}としての静物

目次

生物としての静物

10

ラッキー・ストライクよ永遠に

19

書斎のダンヒル、戦場のジッポ

28

グエン・コイ・ダン少尉とオイル・ライター

36

哲人の夜の虚具、パイプ

45

七日間ごとの宝物、ウィーク・パイプ

53

小さな、偉大な戦士ウエンガー・ナイフ 62

パンパスの野^の点^{だて}肉料理アサードの鞘付ナイフ 71

インディゴ・ブルーの秀作、ジーンズ 79

サドル・レザーのベルト、しなやかで寡黙な友情 87

この一本の夜々、モンブラン 95

カユイ、かゆい、痒い モスキート・コイル 103

ヘヴィー・デューティーの極、軍隊用品の細緻

III

開高流アウトドア、砂糖キビの帽子

120

超薄型の、蓋付の、懐中時計はいいもんだ

129

聖書・百人一首・言海……旅の夜の白想を遠ざける

138

なんとなく、忘れにくい小物、タリスマン

147

亜熱帯夜を噛みしめる、ビーフ・ジャーキー

156

救われたあの国、あの町 正露丸、梅肉エキス 164

煙りの向うの後味を聞く グラス、阿片、そして… 172

水辺に立つ釣師のバッグの中身、あれ、これ 180

使わなかった物、指紋をつけなかったもの 188

道具としての人体、修練の果ての機能美 198

釣師と釣具、あるいは深くもつれあうもの 207

插画 滝野晴夫

構成 三村 淳

長い旅を続けて来た。

時間と空間と、生と死の諸相の中を。

そしてそこにはいつも、

物言わぬ小さな同行者があった。

生物としての静物

昔。

アチラからきた歌で《煙りが目にしみる》というのがあった。《セ・シ・ボン》とほはおなじ頃ではなかったかと思うが、なかなかいい歌で、いまでもときどき耳にすることがある。春にめざめたのは十一歳か十二歳ぐらいで、わるい手の遊びを誰に教えられともなくおぼえてから、人目につかない場所と時間がありさえすると掻きに掻いたものだったが、タバコと酒はそれより遅れ、敗戦以後のことで、十五歳か十六歳ぐらいの頃であつたと記憶する。食うや食わずの栄養失調のさなかでおぼえたものだから、冷汗、吐気、眩暈、頭痛、ほんとうに煙りが眼にしみた。なにがなんでも背伸びして爪先立ちになってオトナの真似をしたい一心で修業にいそしんだのであるが、楽ではなかったナ。

戦争中は徹底的に物が欠乏し、末期には干魚も油もなくなったから、ヨメナ、ノビル、ハコベ、サツマイモの葉と蔓など、カナリアの餌よりひどいものを食べ、空襲のあいまあいまに野原や川岸へ摘みにでかけてアウトドア・ライフにいそしんだものだった。叔父は

タバコの代用にナスビ、カボチャ、イタドリ、カキの葉など、つぎからつぎへと実験に
そしめ、ときにはトウモロコシの毛を紙に巻いたり、煙管きせるにつめたりすることもあった。
酒に窮したあげく、アルコール分があるなら何でもというのでインクを飲んだのがいて、
アテナの赤にはいいコクがあるといったとか、噂うわさに聞いたことがある。そんなありさまだ
から煙りはナスビだろうと、トウモロコシだろうと、おかまいなしだった。ただし、どれ
もこれがいがらっぽいだけでどうしようもないと叔父はにがりきるのだが、そんなことを
いいながらも、誰かにヤマゴボウがいいと聞かされたりすると、イソイソ、どこかへでか
けていった。

一九四五年に戦争が終り、その二年後に旧制の大阪高等学校文科甲類に入るが、これは
一年でおしまいになり、新制大学が始まり、もう一度、受験しなおすこととなる。明治か
らはじまったわが国の学生生活はこの頃、ドン底に落ちこみ、冬休みや夏休みのほかに食
糧休暇が設けられたりする。学生めいめいがリュックなり風呂敷なりを持って田舎へでか
けて米や麦やメリケン粉を調達しておいでという休暇で、一言でいえば、飢餓休暇である。
田舎出身の学生は米をリュックにつめこんで寮にのりこんできた。米のかわりにキューパ
糖が配給されたこともあった。さっそくそれを一升瓶びんにつめて水を入れてドブロクに化け
させたのもいたが、破れ畳にごろりと寝ころんでペロペロ舐なめたのは物凄ものすごい下痢にかかっ
て骸骨がいこつみたいになってしまった。この頃の酒はカルピス（ドブロク）、マツカリ、バクダ

ン、カストリ、焼酎^{しょうちゅう}。いささか気のきいたところではバクダンや焼酎にカラメルでコハク色をつけた「ウイスケ」というバケモノもあった。

黄顔の微少年たちのポケットには敗戦パイプかタバコの手巻器がある。敗戦パイプというのはパイプでも何でもなく、ただの真鍮^{しんちゅう}製の煙管だが、当時、やたらに流行^{はや}った。タバコの手巻器は二本の棒に布をかけたもので、その布をたるませてタバコをつめこみ、紙をはさんで、クルクルとやると、誰でもタバコが作れる。ついこのあいだまで『扶桑』だの、『鵬翼』だの、戦艦か渡洋爆撃機みたいな名がついていたのにこの頃では一変して、『ピース』、『コロナ』、『ハッピー』などが登場していた。しかし、微少年たちのポケットは澄明、純粹をきわめていて、ぺちゃんこだから、もっぱらバラ売りのシケモクを買うことになる。これはタバコの吸殻を町で拾い集め、一コずつはぐして新聞紙の上でよくかきまぜ、それを手巻器で夜なべに巻いたモノ。闇市^{やみいち}やタバコ屋で、一本、二本と、バラで売ってくれる。

ちよつとした駅にはきつと一人か二人の宝蔵院流^{ほうざういんりゅう}の名手が竹竿^{たけざお}の先端に針をつけた真槍^{しんそう}を持って佇^{たたず}んでいた。電車が駅に入ってくると、みんないっせいに吸ってタバコを捨て、手と足で混沌^{こんとん}と非情の生に挑みかかる。乗客を呑みこんで電車は胴をちよつと丸くふくらませて出ていく。すると槍一筋^{やり}の御家柄氏たちは線路に落ちているシケモクめがけて眼にもとまらぬ速さで真槍を繰りだしてチクリ。手繰りこんで、腰の箱へポイ。ふたたび

繰りだし、ふたたびとりこむ。こうやって採集されたシケモクがその夜あちらこちらのランプや電灯の下で、掘立小屋で、防空壕で、新・シケモクとして再生される。微少年たちはひだるい雑炊腹でマージャンにふけり、灰皿が吸殻でいっぱいになると真鍮煙管をいそいそとりだしたり、手巻器で巻きにかかったり、チイだ、ポンだは一時休戦となる。鼻歌は古渡りのドイツ映画。

Das gibt's nur einmal, (たった一度しかない)

Das kommt nicht wieder, (二度とない)

.....

.....

シャンソンも古渡りの東和映画。

La liberté (自由)

C'est toute l'existence (すべてのもの)

.....

.....

この宝蔵院流氏たちの姿は何年も見られたが、一つの特徴があった。どこからどう見てもオンボロとしかいようのないその姿態（誰も彼もがそうだったが……）、しかし、腰にさげたシケモク回収箱が、どういふものか、みんなといっていいくらい、きまって、サントリーのオールドの箱だったこと。その紙箱はしっかりしている上に、字がすべて横文字で、浮彫風にインクがもつくり盛りあげてあり、当時としてはピカ一のシックであった。大阪駅でも阿倍野駅でも、また、東京駅でも新宿駅でも、まるで申しあわせたようにみんなこの箱をさげていた。それを見るたび、氏たちの全身を蔽う窮迫、懊悩、衰頹の症候群にもかかわらず、ひきつれたような微笑がクスリと、こみあげる。都会の人間はどんなに落ちぶれて物乞いとなっても何やらどこか一点、ハイカラを装いたくなるものであるらしいなど、つくづく思わされた。当時は今とちがって大阪と東京では相違することがおびただしくあり、それは路上であちらこちらに目撃することができたのだが、焼酎とこの箱だけはまったく一致していたので、その後も思いだすたびにおかしくってならなかった。

それから十数年後。

一九六〇年、冬。

生まれてはじめてパリへいく。ワルシャワからプロペラ機でル・ブルジェの空港につき、タクシーで市内に入る。その後この都には何度となくいき、おびただしい精力と時間

